

佑啓

ゆうけい

発行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

静風荘の日常

坂本 光弘

医療は治療である。悪い所を治さなければならぬ。リハビリも治療である。麻痺した所を治さなければならぬ。理学療法士になって、この考えに疑問を持ったことはない。

「うちの子供を何とかして欲しい」と真剣な眼差しで見つめる母親と、無邪気な笑顔で「今日は何を遊んでくれるの」と誘ってくる子供たちに対して、40分と言う訓練時間内に良くなった或いは訓練によって変わったと実感して貰わなければならない。若い頃は技術もなければ知識もない為、先輩から教わった治療手技を信じて実践を繰り返していった。少しずつではあるが、子供たちの体が良くなっている実感を持てた。単独入園の愛育園では、主に手術を目的に入園するお子さんに対して歩けるように訓練した。母親と一緒に母子入園では、抱き方を工夫するだけでお母さんが落ち着いた表情をすることが等お母さんへの助言も行った。重度心身障害児が単独入園している陽育園では呼吸器を外せない或いは寝返りが出来ないお子さんに対して体の変形が進まない



佑啓会にお世話になって自分自身が変わった。考え方の優先順位が変わった。体を治してあげたいという気持ちには今も変わらない。その気持ちと共に「寄り添う」という気持ちを持つことができた。勿論、体が治ったほうがいい。で

も治らないものは治らないのである。まずは寄り添って共感し、有りのままに受け止める。それから。慌てず落ち着いて、ゆっくりに周りの景色を見ながら前へ進みましょう。進むことが難しい時は立ち止まっても良いんです。自分のペースが一番です。

「在宅でのご家族の負担が大きいようですので、相談しながら必要な短期入所を行って下さい。」初めて短期入所を行う時は、ご本人もご家族も緊張するのは当たり前です。身体障害者療護施設・県立鶴舞荘の事業廃止に伴い、それまでの施設機能を引き継ぐ形で、入所80名、短期入所8名、計88名の定員で受け入れを行っております。

「ここにちは、いらつしやいませ。ここ静風荘は、平成23年7月に障害者支援施設としてオープンしました。身体障害者療護施設・県立鶴舞荘の事業廃止に伴い、それまでの施設機能を引き継ぐ形で、入所80名、短期入所8名、計88名の定員で受け入れを行っております。」

「ご家族からオムツを交換する時に足が開きにくく、痛そうな表情をする」と相談があります。「わかりました。時間がある時に坂本が体の様子を確認します。」リハビリの要望がある際は私の出番となる。短期入所当日、ご本人の様子を観察させて頂く。こちらからの声掛けは聞こえている。目も合う。ベッド上で体は真上を向いているが足が左を向いている。だいたい変形が強いようだ。足先を触るだけでも緊張が高まり嫌そうな表情を見せる。「触らせてください。」と声掛けしながら、そのまま触れ続けると足だけでなく全体の力が抜けてくる。触っただけで体を緊張させるので、着替える時やオムツ交換で手足を動かす時はゆっくりすると行いやすそうだな。職員にもわかって貰えるように説明しよう。

目立っています。顔を合わせる機会を減らす為に互いの部屋を離れた位置へ変えます。」「Cさんは3ヶ月で5kgの体重減少があります。口からの食事では栄養を確保できないので、補助食品を使用します。」「38度台の熱が出ています。明日は祭日なので今日の内に病院へ通院してきます。80名も入所されている方がいると全員が体調万全という事の方が少なく、色々な報告がある。身体障害者の入所施設なので体が不自由なのはもちろんであるが、高齢の方も多くいる為、少しの事で体調を崩しやすいし、夜間に救急車を呼ぶ事の無いように心掛けています。これも現場で利用者さんの事をしっかりと支えてくれている看護師や支援員がいての事である。



入所施設の宿命だと思いが静風荘の入所者はお盆の時期だからと言って外泊する方は少ない。しかし、いつも頑張っている専門員(賃金職員)の方々のお盆に休みたいと言う希望を出るだけ叶えてあげたい。総合職と一般職でお盆の期間の業務を組み立てられるように工夫しよう。その分、総合職と一般職には、お盆以外の所で連休を取って貰おう。私もお盆の時期に夜勤に入ろう。理学療法士が夜勤をしている施設は稀だと思いが、

夜勤をすることで普段見えないところへの気づきもあった。また支援員と一緒に夜勤をすることで介護の大変さも身に染みて実感できた。佑啓会にお世話になれたから出来た貴重な体験である。

静風荘の施設長に里見理事長から告げられたのは平成31年2月後半であった。そして4月に就任させて頂き、施設長と呼ばれるようになって半年が過ぎようとしている。変わった事といえば静風荘の行事で最初の挨拶を行う機会が増えたことくらいかな。他は利用者さんに新規採用者職員を紹介することもあった。でも、朝起きる時間が早くなった訳でもなく、机の袖が2つに増えた訳でもなく、頭髮の量も減ってはいない。いや、まてよ、リハビリの時間が減っているかもしれない。これはいけない。机に座っていないで現場を回らなければならない。まあ、施設長といっても私が居なくても業務は回っている。今はこれでもいいのかもしれない。みんながまとまって雰囲気良く働いてもらえていたらそれでいい。誰かがつまづいた時にしっかりサポートできたらいいのだけれど、まずは困った時に相談してもらえようになる事が先決だ。みんなの信頼を得られるように、おらかな気持ちで待つことにしよう。

(ふる里学舎静風荘 施設長)



まずは

レスパイトから

渡辺 美紀

娘が小石川福祉作業所に入所して今年で十年目になります。学生の頃は悩みのタネだった長期休暇もなく、居場所(と給食)を提供してくれる作業所の存在は大変ありがたく、徒歩で通える圏内に毎日安心して過ごせる場所がある幸せに感謝しています。体調を崩すこともなく、ほぼ皆勤賞の娘。作業所の行事にも参加してきているなか、レスパイトだけは、いつでも利用できるように契約を済ませていながら一度も利用することなく数年が経っていました。数日間の休日なら問題なく家で過ごせること、初めての経験の前には必ず落ち着きがなく、対応に苦慮すること、心配性な母親にとって荷物を準備して送り出すことが負担に感じること、などがレスパイトの利用をためらう主な理由でした。本人が行きたがることなく、いつも通りの休日の過ごし方(父親との散歩)を望むということも理由の一つでした。



昨年、小石川福祉作業所が
キレイに生まれ変わりました！

昨年四月、小石川作業所は改修工事を終え九ヶ月半ぶりに再開しました。慣れ親しんだ小石川を離れて心の多い日々をやっと乗り越えた末の再開に、親は心底ほっとしたので

すが、娘は予想外の反応を示しました。主治医の先生の話では、環境の変化が苦手な娘のような人にとって、全く別の場所に移ること以上に、知っている場所の雰囲気が変わったという状況は苦痛で、慣れるのに一年近くかかることもある、とのことでした。そんなことが？と戸惑いながら、作業所にハートフルを下げて見守ってもらいました。が、不安定な状態が続く多くの迷惑をかけ、行き帰りは付き添うことにしました。そんななか父の死去も重なって心身ともに疲れていた私に「短期入所という選択肢もありますよ」との助言をいただきました。その時はレスパイトさえ経験させていない状態であり、一日一日を何とかやり過ごして



和田浦の夏は海での磯遊び！
都心では経験できない体験です。

レスパイトに対しては、その言葉の意味通り「障害を持つ子どもの親を一時的に介護から解放すること、心身の疲れを回復させる援助」という捉え方をしていました。しかし今回、親が解放されたからではなく、本人にとって楽しい経験だから参加するもの、と気軽に捉えればよいの

だと気づきました。作業所の一泊旅行と同様に親のいない環境で仲間と楽しく過ごすもの、親子共々リフレッシュする機会なのだと感じました。将来を見据えて、自宅以外での宿泊に慣れさせるという意味でも重要な機会であると考えます。もしもかしら本人よりも親の方が、その子がいらない生活に慣れる必要があるのかもしれない。街歩きに付き合ってもらっているのは父親の方かもしれせん。母親である自分が一番娘のことをわかってあげられると思い、子離れできずにいるのは私の方。親がいなくていいところでも娘は楽しめている、何とかやってくれるということ信じ、他の人に任せる場面を増やしていくことが必要なのかもしれせん。



自然に囲まれるふる里学園和田浦で
2泊3日のんびり過ごしました。

初めてのレスパイト、行く前は案しみな気持ちと緊張が混ざって、案の定おかしな様子が続きました。帰宅後は「また行く」と笑顔でしたが、いつかは「親亡き後」が訪れることを頭では理解していても、離れていっていませんでした。今もまだ先のことを感じていますが、一度娘のいな生活生活を想像したせいか、送り迎えが必要になった現状も「こういう時を一緒に過ごすのも悪くないのかな」と思えてきました。あまり先を見すぎず、しかしどこかで意識しつつ、今を大切に過ごしていきたいと思っています。

(小石川福祉作業所 保護者)

名もなきバンド、始動！

誕生秘話、その先へ

松田 夏美

「職場で、音楽が好きで人同士の集まって演奏がしたい。野球部やバレー部みたいに、仲間と一つのものを作りたい。」

始まりは、私と先輩職員の小さな「ふたりごと」だった。そのさきやきを聞いた、キーボード、サキソフオン、クラリネット、トランペットの四名が集まった。花形楽器が少し揃った！これだけですでに私は胸が躍っていた。そんな時、「職員でビッグバンドを組むのが夢だった。まずは法人内のイベントで、ファミリーステージを組んでみる」と里見理事長のお言葉。チャンスが急に飛び込んできた。本格的にメンバー募集のチラシ作成や、各事業所の職員への誘い掛けなどを行い、法人の協力を得てメンバーは徐々に集まった。

それから全速力で楽譜作成、演奏方法の確認、音響調整や音合わせを行った。勤務終了後に集合し、「お疲れ様です」と笑顔で挨拶を交わす。そして演奏が始まると、普段、職場で仕事に向き合っている時と同じ本気の表情が見られた。楽譜を見つめて周りの音や自分の音に向き合う。隠しきれない音楽の楽しさが見え隠れする。そんな瞬間がたまらなく愛おしい。やり残したことはないか。もっと出来る事はないか。最後まで確認を重ねた。打ち合わせや、リハーサルも終えて、ついに六月の「法人内交流会」で初舞台を迎えた。

当然緊張はしていたが、それよりも演奏が楽しすぎて仕方がなかった。聴いて下さる全ての人に、自分たちの気持ちを持って頂きたい。今回は懇親会内での演奏であったが、まずは落ち着いたスムーズジャズの鉄板「Moonlight Serenade」を演奏。そして、ボーカルを入れた「糸」、最後は

佑啓会のゆずと噂される職員二名をボーカルに招いて「栄光の架け橋」。響く拍手の音が聞こえて、自分たちの演奏が終わったことを実感した。十数名のメンバーは「名もなきバンド」という名称でデビューした。有り難いことに、次の演奏も決まっていた。七月の三法人交流イベントでの演奏である。また新しい目標へ歩き始めた。舞台のセッティング、お客様に楽しんで頂ける選曲、準備から演奏終了までの構成、音響の設定などメンバー一人ひとりが懸命に取り組み、新たな本番に向かって自分たちの演奏を作り上げていった。私は昔からこの過程が大好きだ。



日々練習を積み重ね
作り上げていきました！

いよいよ三法人イベントの日、控室で聴こえてきたのは自信に満ち溢れた他法人の演奏の音。凍りついたメンバーの口からこぼれた「う、うまい！」という一言。演奏クオリティがとて高く、メンバー全員が心が折れそうだった。確かに、「名もなきバンド」は始まったばかりで、演奏クオリティはプロには程遠いかもしれない。それでも、重ねてきた練習は本物で、確かな音を作ってきた。これまでメンバーが力を合わせて作ってきた音を100%、繰り出すだけでいいはず。メンバーが真剣に、そして楽しんで演奏することがお客様に喜んで頂ける一番の近道だ。メンバー一人ひとりの思いを乗せて、本番は一瞬で過ぎ去った。前回の演奏と違う事は、自分たちに何が足りないか、そしてそれを補う為にどんな努力が必要であるかを、他のバンドを目にして気づくことが出来たことだ。

毎年の納涼祭に出演している「大西ブラザースバンド」の最後のナンバーに、名もなきバンドと職員二名をボーカルに迎えて、ディズニーが実写化し大ヒットした映画「アラジン」の「A Whole New World」を演奏した。納涼祭の演奏は地域の方や、小さなお子さんにも聴いていただける初めての機会であった。ボーカルに絡め合うクラリネットとサクソフオンの裏旋律。低温で優しく音楽を運ぶユーフォニウムとトロンボーン。演奏が盛り上がる中盤に差し掛かった所で、歌を口ずさんでいる様子のお客様が見えた。この場で演奏者とお客様が、少しでも音楽を共有することが出来たのかと、心の中で小さくガッツポーズをした。

納涼祭を終え、今月末にも演奏の機会を頂いている。バンドの醍醐味は、全員で互いの考えをぶつけあいながら様々な形で「音楽」に向き合っていく事だと思ふ。「仕事も本気、遊びも本気」という佑啓会のモットーの下に生まれた、初のビッグバンド(ミニ?)。メンバー全員が楽しみ、お客様にも沢山楽しんで頂くため、一生懸命演奏を続けていきます。これからは応援の程、宜しくお願ひ致します。

(そよかせキッズ 支援員)

編集後記
厳しい暑さも落ち着き、徐々に秋めいてきたように感じます。「芸術の秋」を迎え、今後もバンドの活躍に期待が高まります。皆さんの元へ素晴らしい音色が届きますように。

(支援員 関岡 弘太)



本番後の笑顔。
今後も佑啓会を盛り上げます！